2013年11月26日(火)

# 貴族50人寄せた？和歌集

## 輪島で確認 江戸期の親鸞550回忌

和歌集を見る西山郷史さん（右）と華岡鐵玄・長誓寺住職＝輪島市西二又町

浄土真宗の宗祖・親鸞の550回忌（1811年）に江戸時代の貴族50人が和歌を寄せた巻子本の和歌集が、輪島市西二又町の長誓寺で見つかった。本物なら江戸時代の東本願寺の力を示す資料といい、大谷大学に調査を依頼する。

和歌集は縦33㌢、長さ443㌢。垂れ下がる雲の模様が入った和紙に冷泉家や皇室、関白、東本願寺20代門跡らの歌がほぼ身分の高い順にならぶ。「従四位上」という島津氏や伊達氏と同格の身分の貴族が、それより身分の高い人々の作品を記帳したとみられる。それぞれの歌には「早春」「霞」などと題がつけられ、「けふの朝霧昔へたてぬ光なるらむ」など、仏の教えや親鸞の足跡をたたえる内容が記されている。

約30年前、華岡鐵玄住職(82)が寺の蔵で見つけた。今月になって、宗教民俗に詳しい珠洲市・西勝寺の西山郷史住職(66)に調査を依頼した。東本願寺は江戸時代に何度も焼失して文書はほとんど残っていないといい、西山さんは「財力のあった能登の船主が生活に困った貴族から買ったのかもしれない。当時の貴族の世界を知るきっかけになる」と期待する。

本願寺史料研究所の金龍静・副所長は「真宗とは関係がない貴族がこぞって和歌を寄せており、日本文化への大スポンサーだった本願寺の威厳の高さを示している。本物ならば非常に貴重な資料だ」と話す。

「西保村誌」によると長誓寺は、浄土真宗中興の祖・蓮如と同時期の1449年に開かれた。（藤井満）